

# シャーキャチョクデン著『如意〔の〕 妙高〔山〕』和訳（I）

原 田 覺

ここに翻訳する資料は、シャーキャチョクデン＝ディメーレクペーロ Śākya mchog ldan dri med legs paḥi blo (AD. 1428～1507) が著述した小品であり、主題は印度とチベットに於ける中観思想の思想系統を論じたものである。著者はサキャ派のゴル寺に所属した学僧であったが、ジョナン派の他空説を支持する見解を持ち、ゲルク派の開祖とされるツォンカバ（1357～1419）を批判した為に、ゲルク派の学僧たちの反批判を受け、終には著作そのものもチベット本土には残されない状態となった人物であり、ジョナン派と同様にチベット仏教の本流と対立した異端の学僧である。しかしチベット仏教の研究にとっては、本流と異端の双方を比較対照することによって、研究の出発点となるさまざまな問題点を把握することが出来るのであり、その意味でこの資料も貴重な情報を伝えてくれている。

翻訳に当って依用したテキストはブータンで複製出版された唯一の写本の全集である *The complete works (gsun 'bum) of gSer-mdog paṅ-chen Śākya-mchog-lدان*, Kunzang Tobgey ed., Vol. 1～24, Thimphu, 1975 の Vol. 4, No. 3, foll. 1～20 (coll. 209～248) である。ジョナン派とこの著者に関する紹介と研究が、文献目録と共に『西藏仏教宗義研究（第6巻）』、トukkan『一切宗義』チョナン派の章』谷口富士夫、(財) 東洋文庫、東京、1993年に示されており、参照されたい。また訳文中に注記した略称は、北京版Naが『〈影印北京版〉西藏大蔵経、総目録』165～8巻、西藏大蔵経研究会編、東京・京都、1961年；デルゲ版Naが『西藏大蔵経総目録』東北帝国大学法文学部編、仙台、1934年；西岡Naが『『プトゥン仏教史』目録部索引』Ⅰ～Ⅲ、西岡祖秀、『文化交流研究施設研究紀要』4～6号、東京大学文学部、東京、1980～3年のそれぞれに記載されている仏典番号である。

翻訳に当っては直訳を原則とし、今後の研究の出発点を提供することを目的とする為、注記は訳文中に示すもの以外すべて省略した。その為に、日本語として文意を把握しにくい部分も残ることになったが、特に術語や熟語については可能な範囲でそれらの用語が成立するに到った文法的根拠を補うことによって、少しでも文意の理解に役立つ様に努めた。諸賢のご批評を賜われれば幸いである。

一  
七  
二

(1a1) 『中観の現われたやり方を完全に説示する論、如意〔の〕妙高〔山〕』と言われる論書がお在りになる。

(1a1/1b1) オーム、善妙に所行が成就するようになれかし。清浄な法界の天空から移らずに 四種の無畏の車にお乗りになってから 三千〔の〕国土 (1/2) に太陽 ni〔ma〕の通日常〔に〕出現する方 偉大なる太陽〔の如き〕能仁王 (仏)

に敬礼いたします。悲愍の〔月〕 齢を集積した月は 夜の守護者として何時でも出現する通りに 十二の〔四〕 諦〔の〕 意義〔の〕 (2/3) 主人の青年が 大地を昼となさることによって常に〔に〕 守護する様に。と恭敬として述べることを初めに発してから、何方であれここ〔の国〕に於いて著名な白傘蓋で円 (3/4) 形 thig le (明点) の一つの日除けによって三ある有 srid pa gsum po〔の〕 総てを遮断なさることによって、無辺の衆生たちに利益することと安楽の偉大な親しき養いを受用すること〔と〕に (4/5) 入らせる方は、我々の導師たる正等覚の仏で、無比〔の〕 シャカ〔族〕 Śākya の王たる彼だけである。このことそのものの故に、彼の大きいなる宝〔の如き〕 教示〔の〕 余りなき (1b5/2a1) 精髓と精華となったのは、中観の道と言う全て〔の人〕に称されたこれであるのであつて、その完全な設定が要点のみを述べられる時、最上の勝者のお仕事〔の〕 主のご命 (1/2) 令そのものであるが故に、説示することになるこのこと丈を記述することに罪は無いと説示することに保証があって、この様に説示することに於いて意義は三であつて、〈1〉中観の相性 mtshan nid, 〈2〉名相 mtshon bya の語を説示すること、〈3〉事相 mtshan gshi を (2/3) 完全に分析することである。

〈1〉最初は、二辺を完全に棄てる道である。

〈2〉第二に三あつて、〈21〉辺の識別である所のものと、〈22〉道の〔識別である所のもの〕と、〈23〉その様に摂受することによって中観そのものを成就することである。〈21〉最初に三あつて、〈211〉共通〔的〕 (3/4) のみからと、〈212〉当面したことと、〈213〉それについて論争すること棄てることなどである。

〈211〉最初に於いて、異教徒と、この法の者 (仏教徒) たちの差別は、見解が辺に住していることと、中央に住していること〔と〕からと、行為が外〔境〕に愛着していることと、(4/5) 内〔心〕に入ること〔との〕二から〔とで、それ〕は、外道と、異教徒と、中観者と、仏教徒であると言われる。ここで当面したことは、見解の差別からであつて、異教徒たちは、我など〔の〕十二ある能作の人が (5/6) 有る yod pa と承認することは常〔辺〕を述べることそして、今生に見える我などは有つて、前〔生〕から今〔生〕に来ることと、今〔生〕から後〔生〕に行く我などを承認しないことは断〔辺〕を述べることであつて、宗義 grub mthaḥ を述べる異教 (2a6/b1) 徒は、あらゆるものがそこに集約するので、全て〔の人〕はまた辺あるいは際 mu に基礎 stegs を創出するので外道を為す。仏教徒の中観に於いて、劣った宗義などと共通には、我執が俱生〔すること〕によって全て認識された私と我などは (1/2) 本来有り得ないが故に、有 (有る) の辺は言うまでもなく、或る有に於いて正理の力や、減さしめる或る他の原因によって無 med pa (無い) とされることで〔は〕また、ないのである ma yin pa が故に、無の辺からも解脱する。有 (2/3) で〔は〕ない〔と〕は何故かと言うならば、我〔と〕 蘊〔の〕 一と異などについて探求する五の正理によって探求した時得ないが故にである。と言うことであつて、この正理からその様に考えることは一切の

仏教徒の共通〔項〕である。しかしながら犢子部 sNal/gNas ma buhi sde pa は、(3/4) 常〔と〕不常の差別を結びつけてから説く。声聞部が法〔の〕我の辺を排するやり方を少々承認するのは、如何程であれ共通相 spyi mtshan は本来有り得ないが故に、有〔の〕辺から解脱し、迷誤〔の〕側面で有るが、正理で真 (4/5) 理である〔こと〕や、他の原因によって無とされることであるので〔は〕ないので無〔の〕辺からも解脱する。大乘に於いて、唯識派 Sems tsam pa と、四つの宗義の頂点のもの〔の〕二の内で、最初は、声聞と共通の二辺を排する (5/6) やり方それを根本として設定してから、顕現者は自己の心以外の外〔境〕の対象から最少微塵に至るまで本来有り得ないので、有〔の〕辺を排し、有〔の〕辺を排することそれはまた、正理の如き力によって (6/7) 無とされることで〔は〕ないので無〔の〕辺を排し、その様に排する中観は、所取の法と補特伽羅の為に作られた二辺を排するそれぞれのやり方によって特別に作られた全ての道である。事物について述べる dÑos por/po smra ba (実事師) (2b7/3a1) これそれの者たちは、見の時二辺を排し切らず、行の時それらを排して、〔何故ならば〕唯識派は行が福德資糧を積む時も外〔境〕の対象は有ると承認しないことによってそして、(1/2) 毘婆沙〔師〕 Bye smras は、何であれ有るもの一切は物質としてであるのである〔と〕しようとし、施設された有を承認しないことによってである。

〈212〉第二、当面したことは、四ある宗義の二辺を排するやり方に二あって、〈2121〉瑜伽行派 rNal ḥbyor spyod pa のと、〈2122〉実体性は (2/3) 無いと述べるもの Ño bo ñid med par smra ba〔の〕である。

〈2121〉第一は、弥勒 Byams pa の〔五〕法から仰せになった様に、所取と、能取の事物は、本来有り得ないが故に有〔の〕辺を排し、そしてまた真実の正理や他の原因〔と〕縁によって無と (3/4) されることで〔は〕ないので無〔の〕辺を排する。その能証はまた、以前に有った或るものが後に無となってしまうことそのものについて承認したならば無の辺に住することであって、世間の人が以前に財宝が有ったのに後に消費した時財物は (4/5) 無いと承認したことによって、常〔と〕断〔の〕両者の辺に住することである。この考え方の中観は、所取〔と〕能取の二辺から解脱することや自証が自ら明らかなことである。この考え方に於いて法の界以外 (5/6) の他の法を承認しないので、唯識派と〔の〕差別は本当に大きい。

〈2122〉第二は、如所有と尽所有の全ての所知は本来有り得ないので有の辺を排し、以前に有った或るものが正理や (6/7) 聖者の智〔と〕見によって無とされることで〔は〕ないので無の辺を排し、何ものも有り得ないので両者であるのである辺を排し、何ものかに依存する〔その〕依存〔された〕処 bltos sa が両者であるのであることはあり得ないならば、依存〔された〕法 bltos chos が両者であるのでない (3a7/b1) ことも承認出来なくて、〔何故ならば〕依存〔して〕成就〔したの〕であるのでない法を承認したならば諦〔として〕成就〔したものの〕bden grub (諦実有) から脱していないが故に、〔と〕説かれた所の無〔の〕辺

を排する全てのやり方は、偉大なる中観派 dBu ma pa chen po〔の〕方々が引用した経から、(1/2) 空性の諸法を空にするが、諸法そのものは空であることと、と言うなど〔の〕広く引用された意義であるのであること明らかである la/lo (?)。

〈213〉第三は、後代のチベット人たちが、言説として有るが故に無〔の〕辺を排して、諦として無いが (2/3) 故に有〔の〕辺を排する。と言うのは、経説と一致しなくて、〔何故ならば〕見の時有〔として〕執〔する〕yod ḥdzin 分別を阻止する必要があることを知らないことと、見の時言説が堅固になってしまうことと、二〔辺と〕であるのであるが〔その〕辺を排せないならば経説と矛盾して、排するならば主張命題〔と〕相互〔に〕矛盾するが故である phyir [ro ?]。

〈22〉第二、道の識別である所のものは、有〔と〕無の二辺を排する必要があるならば、それ以外の道はあり得ないと思う時、声聞派と、唯識派と、(4/5) 瑜伽行の中観派たちによってもであって、彼等は各自の宗義に於いて称するそれぞれの二ある辺を排したり代りに、等引と後得の智慧を何程であれ承認した (5/6) それぞれが有法であり、中観の道であるのであって、〔何故ならば〕如何なる二ある辺にも住さない解脱そのものに趣かせる機会を開いた代わりとなしてしまったが故であり、実体性は無である〔とする〕者の中観の道は、自己の中観の見解を識 (6/7) 別する時にこの様であると言う識別は出来ず、その時に辺に至らなかった所知はあり得ないが故であり、例えるならば有無と、であるのであるでないのである yin ma yin と長短などは世間の人と、事物〔について〕述べる者によって相互に棄てられて住する (3b7/4a1) と承認されていることそれら〔のこと〕である。

〈23〉第三は、それ故に pyir/phyir 状況が心に入ったその時有効法は、何にも住さない無として否定することそのものに於いて中観〔に〕そして、有境の如何なる覚慧によっても如何なる対境にも (1/2) 住さないことそのものに於いて中観に住することであると言われる名称は言説〔として〕付けられたものであって、謂る、不合理〔と〕合理などと、虚空が見えると有情が言葉に明言することは、虚空がどの様に見えるかと言うこの意義を分別しようと (2/3) しなさいと言うことである。ここでまた、帰謬〔派〕Thal〔と〕自立〔派〕Raṅ〔の〕誰しにも称された真実の正理から生じた或る正量 tshad ma が先行する必要があって、そうでなければ龍樹 Klu grub の考え方でないのであると、学者たる蓮華戒 Pad maḥi ṅaṅ tshul が説示した通り (3/4) である。全ての乗の頂点の中観に於いては、二辺を排した代わりに中観の道を各々が自らが証す智慧のみによって感じられるべきことは言葉〔と〕分別の対境から離脱すること〔の〕一であって、その考え方に於いては聞〔と〕思によって増 (4/5) 益を断ずる見解と、修〔習〕によって体得されるべき見解〔と〕の識別〔の〕それぞれそのものは『金剛歌』rDo rje gur (西岡No1525参照) と、『時輪』Dus kyi hkhor lo (北京版No 3) から仰せになった通りである。

〈3〉第三、事相の分析に三あって、〈31〉所詮たる意義の (5/6) 中観の分析を

要略として教示し、〈32〉能詮たる言葉の規矩〔の〕開始がどの様に現われたかによって広く説示し、〈33〉それらの場合に於ける否定〔と〕成就を少しく為しますことによって意義を総括することである。〈31〉最初に於いて三あって、〈311〉実体〔の〕識別〔と〕、〈312〉それが如何なる経言〔の〕根拠から現われたか〔と〕、(6/7) 〈313〉他〔の者〕の考えが偏狭であると説示することである。

〈311〉最初は、全ての宗義の頂点となった所詮たる意義の中観に於いて識別は二であって、無分別を修習することによって体得されるべき中観と、分別された(4a7/b1) 相〔を〕認識〔する〕 mtshan hdzin 増益を断ずる中観〔と〕である。この最初に於ける相の異名は勝義たる菩提心の金剛と、趣たる善逝の蔵 bde bar gsegs pañi sñiñ po (如来蔵)と、各々〔の〕自証の智慧の行境と、修習から(1/2) 現われた般若によって体得されるべき〔もの〕と、法の界の智慧と、全ての行相 rnam pa の最上と共なる空性などと称されて、その後者の相の異名は、聞〔と〕思の増益が断じられた空(2/3) 性と、言説によって施設〔された〕意義を探索することによって〔は〕得られない空性と、覚慧の対境から脱した空性と、無と否定する空性と、蘊を完全〔に〕断〔じた〕空性などと称される。

〈312〉第二(3/4) は、相の異名〔の〕前者を持つそれらは、仏説たる第三〔法〕輪の経と、全ての乗の頂点となった統部などから仰せになって、相の異名〔の〕後者を持つそれらは、根本に仏説たる中間の〔法〕輪(4/5) と称される般若波羅蜜の経の明白〔な〕説示と、他にも多くの経部など〔と〕から一度ならず仰せになった。

〈313〉第三は、或る中観者たちは、謂る、蘊を完全〔に〕分析〔する〕空性は芭蕉の通り(5/6) に蔵が無い sñiñ po med (無意味である) という経言を根拠としてから、無と否定する空性は中観ではないのであると述べることに、或る者は、謂る、完全に分析する拠所 dpuñ は堪え得ないが故に世俗諦である。という経言を根拠として(6/7) から、その前者は中観で〔は〕ないのであると述べることに〔と〕などが現われたが、両者はまた根拠たるに足る経言から仰せになり且つ、無辺際 of 功德の所依となることに於いて、その前者は無であり得ず且つそれはまた世俗諦であると承認するならば、(4b7/5a1) 無明によって染められた法に帰謬して、無と否定することは空性が正理聚〔六論〕 Rigs tshogs から説示された正理によって決定しないならば、謂る、それそのものが分からない〔ならば〕輪廻する時 涅槃(1/2) したと輕慢〔に〕思っ て それそのものが見えるならば輪廻する時 涅槃したと輕慢〔に〕思っ 〔ことは〕無い と説示された様に相〔の〕認識の分別を阻止し難い故に、それ故にここに於いても中観のやり方はその前者が損(2/3) 減の辺を排するようにさせて、後者が増益の辺を排するようにさせる。その様に了解する時、中観の分析は他〔に〕もまたこの様に説示することが出来て、一切法は実体性が無い〔と言う〕やり方を持つ中観(3/4) と、円成〔実性〕は実体性であると述べるやり方を持つ中観と、無上の密咒の中観〔と〕である。最初は正理聚〔に〕随従するものと共なる〔名称〕と、中間は弥勒の法

〔に〕随従するものと共なる〔名称〕と、後(4/5)者は、双運〔の〕『喜金剛』*dGyes pa rdo rje* (北京版№10) と、『総摂輪』*hKhor lo sdom pa* (北京版№16) などの名称〔と〕によって説示された方々であって、直ちに説示されることとなる。

〈32〉第二は、〔二大〕乗師の規矩〔を〕開〔くこと〕が如何なる現われ方かを広く説示することに三あって、(5/6)〈321〉聖なる国(印度)で中観の論書を著述したこと、〈322〉それそのものが有雪の国(西藏)に如何ようにおいでになったか、〈323〉中観が一部分に固執する罪過を教示することである。〈321〉最初に於いて、〈3211〉吉祥なるサハラ *Sa ra ha* が道〔の〕規矩を開いたやり方によって(6/7)要略として教示し、〈3212〉〔二大〕乗師の二つの偉大な規矩が開いたやり方を広く説示し、〈3213〉〔密〕咒の中観〔を〕別に〔して〕説示すること無きを得ないと教示することである。

〈3211〉最初は、謂る、私が涅槃した後に 年は四百〔年〕経過した時 と言うこと(5a7/b1)などを仰せになった様に、中観の論書の規矩〔を〕開〔く〕最初は、守護者たる龍樹がお造りになったと称されるけれども、彼だけでなく彼と時を同じくする方がまた少しだけ以前に、偉大なる婆羅門にして吉祥なるサ(1/2)ラハなる方が、無分別の心の金剛を所詮として教示する中観の論書を歌に唱ったやり方によってお造りになって、彼から相承者と規矩〔を〕開〔くこと〕が如何ように現われたかのやり方は他〔の所〕に明らかなのでここに〔は〕書く(2/3)必要はなくて、その論書に教示された中観は、謂る、心そのものだけが全ての種子であって 何に於いて〔も〕有と涅槃が発すること 考えの結果を給付することを為す 如意宝珠の如き心(3/4)に敬礼する。と言うことによって識別されたことであるのであって、それはまた聖者たる無着 *Thogs med* が阿頼耶〔識〕のみと、趣たる善逝の蔵の能成就 *grub byed* として、経の経言を根拠に為さるその方ご自身と意義は(4/5)一つであるのであって、謂る、無始の時の〔法〕界は 諸法が全て〔のもの〕の住処であるのであって それが有ることによって全ての衆生と 涅槃はまた得られるようになる と言う引用されたものそのものである。この意義はまた、(5/6)無始の心たる自性が光輝くこと *rañ bshin gyis hod gsal ba* (如来蔵) それそのものは、基位 *gshi dus* の法界たる智慧であると言われるものであり、名称の異名は、原因の原因と、趣と、〔法〕界と、語基と、有情と 仏(6/7)〔の〕両者の趣と説示されて、そのやり方はまた、心が光輝くその上に、輪廻の薫習を集積し且つ成熟することは自性が光輝くそのことと離れる〔ことが〕できる様になったそこに於いては、阿頼耶の(5b7/6a1)識と言われ且つ、それは輪廻によって集められたが故に中観で〔は〕あり得ない。また光輝くその上に、涅槃の方面の薫習を集積し且つ、光輝くそのことと無差別(1/2)となった部分に於いては阿頼耶の智慧と、自性たる法身と、仏の蔵と、有情たちは仏そのものである、と言う名称によって教示されたそれであるのだ。大翻訳〔師〕たるゴク *rNog* (1059~1109) から相伝した法相家(2/3)たちは、有垢の心が戲論と離れた無と否定するそのことについて説示するけれども、前に引用したばかりの経〔の〕

経言〔の〕相承〔者である〕上人 bla ma のそれぞれの方は仏そのもの sañs rgyas nid (仏性) である、と言う名称によって教示されたそれであるのだ〔とする〕。論 (3/4) 書の三者の明白〔な〕教示と適合するものではないのであって、他のチベット人たちは言う、弥勒〔の〕法たる修習〔の〕考え方と、法相家の考え方〔と〕に於ける二つの注釋から、翻譯〔師〕たるゴクは弥勒〔の〕法に対して正理聚によって広〔く〕覆ったが (4/5) 故に法相の考え方であると言う者たちが現われた。

〈3212〉第二に於いて、〈32121〉龍樹が随従者と共に開いた規矩と、〈32122〉無着が兄弟と共に開いた規矩と、〈32123〉そ〔の〕二つが相応する様に開いた規矩とで三で (5/6) ある。

〈32121〉最初は、守護者たる龍樹は、地の上に獅子の声を三度響かせた、と説示することから、謂る、一切の罪惡が現われる住处 それそのものを完全に阻止し終った〔こと〕によって 如何なる正理によって有 (6/7) 性を 阻止することとなるかを聞きなさい とある如くに、廣大行 rgya chen spyod pa の方面を根本として教示するものたる、勸戒聚 gtam tshogs の論書を最初にお造りになり、甚深見の法たる、聞〔と〕思によって増益を断 (6a7/b1) じた空性を根本として教示するものたる正理聚の論書を中間にお造りになり、習修によって体得されるべき空性を根本として教示するものたる『菩提心釋』Byañ chub sems hgræl (北京版 No2665=5470) と、『心金剛讚』Sems kyi rdo rje la/hi bstod pa (北京版 No2013) などを最後にお造り (1/2) になった。と称されることから、それらの規矩〔の〕部分を等しく認識する方たる聖なる提婆 hPhags pa lHa は、ご子息の〔内の〕最勝の長子となった方であって、『四百論』bShi brgya pa (北京版 No5246) などの論書を沢山にお造りになり且つ、彼の規矩を持する方たる無畏なる護法 Chos skyoñ (2/3) 足下は中間の〔法〕輪のお考えは、第三の〔法〕輪によって注釋するやり方が経そのものから現われる如くに、昔のご父子その方々のお考えを唯心 rnam par rig pa tsam (唯識) として注釋する論書などをお造りになった。と (3/4) 称されることに於いて、実体性は無いと述べる人々が諷刺する時、謂る、二つある諦を完全〔に〕開いたが 大乘〔師の〕方々が愚昧 rmoñs nid/gñid であるならば 他〔の〕人々は述べても何の要もなく (何をか言わんやであって) と言うなど〔と〕説示したと称されて、その〔様な〕話と言う (4/5) その意義は、世俗の諦は世間の常識〔の〕通りに説示する必要がありそれは、中觀の考え方であるのである時、あなたが kyi/kyis 唯心と説示し、暫定〔の〕勝義の諦として説示するそれはまた、最終的に (5/6) 正理の伺察〔に〕は耐え得ないので世俗の諦であると説示する必要があることから、あなたが、常に唯心と説示することによって過失である、と言うことであるのだ。それら前後二つある方面は、金剛乘の了義〔を〕建立する (6/7) 考え方と如何なる相応があるのであるか〔が〕以下から伺察されるべきである。龍樹足下の弟子で中間においでになった方は、仏護 Sañs rgyas bskyañs と、清弁 Legs ldan hbyed であると称されその方々の注釋が、正理聚の説

示〔する〕やり方は実体 (6b7/7a1) 性は無いと述べるのみの考え方であると決定することに相応するその時、一切の所知は自己の実体が空であると言われることそのものであると説示することに相応して、実体に於いてまた各々の柱が空である様なことは (1/2) 世俗〔諦〕の実体は空であるのであって、各々が空性である〔こと〕は、暫定的に柱の勝義の実体として設定されたが、それもまた明知によって伺察される時、それはまたそれが空であることは、柱は自己の勝義の実体がまた空である〔ことである〕。その様に柱 (2/3) に於いて実体〔の〕両者は所縁たりえないが故に、それはまた有でないのであり且つ、その時無そのものとしても承認しなくて、〔何故ならば〕依存が有ることを承認しないが故にであり、そのやり方の様なことを一切の所知に適用してから説示することは、実体性が (3/4) 無い〔とする〕方々の共通〔の〕考え方であって、謂る、若しも空でないものが僅かに有る〔ならば〕 空が僅かに有ることとなり と言うことと、一つの事物が全ての事物の実体性であり と言うこと〔と〕を根拠として引用する。注釋〔を〕お造りになった軌範 (4/5) 師その方々は、決定されるべき空性の識別〔の〕考え方は一つの意義に集約するが、決定するやり方が相異している差別はこの様に、軌範師たる仏護が最初に、自から (5/6) でないのであり他からでないのであり と言う意義を注釋する時、謂る、事物で我所〔と〕我そのものとして有るものなどに於いてまた生起が必要であることは無い。と言って有るけれど生起するならば決して生起しないこととなる。と言うなど (6/7) の門によって注釋する様に為さったことについて、軌範師たる清弁が、謂る、それは正理でないのであって、〔何故ならば〕因 *gtan tshigs* と喩 *dpe* が述べられていないが故と、他〔の方〕が述べた罪惡を排さないが故と、(7a7/b1) 帰謬する言葉であるのであるが故にであり、章節の意義から阻止されたことによって、宗と、その法が反対の意義〔であること〕が出現するので、諸事物は他から生ずることとなりそして、宗義と矛盾 (1/2) することとなる。と言うなどの門によって批判するように為さって、その意義は、仏護が数論〔派〕 *Graṇs can* を否定するその正理を自立と帰謬〔の〕何とするのか、最初の様であるならば、因と喩が (2/3) 相似する過失が有り、後者の様であるならば、自立を放棄しない帰謬が比量を生ずること〔は〕出来ず、それを放棄するならば、反対〔の〕意義に生ずることを承認するので、正理〔の〕面の生に到って、その時宗義と矛盾すると言う (3/4) ことである。この軌範師の説示〔の〕相承をその様に認識する総て〔の方々〕に対して中観自立派と称して、そこでまた吉祥なる隠蔵 *dPal sbas* と、智蔵 *Ye śes sñin po* などから次第に相承する方〔々〕と、菩薩たる寂護 *Shi ba ḥtsho* ご父 (4/5) 子から次第に相承する方々〔と〕であって、この二つある規矩に対して順序通りに、大翻譯師たるイェシェデ *Ye śes sde* がお造りになった『見解の備忘録』 *ITa baḥi brjed byan* (北京版No5847) から、経部行の中観と瑜伽行の中観と説示 (5/6) された。これらの軌範師がお造りになった論書の根本は、智蔵が『入二諦』 *dDen pa gñis la ḥjug pa*〔の〕根本〔頌と〕注釋 (デルゲ版No3881～2; 西岡No590～1参照) と、菩薩たる寂



護がお造りになった『〔中観〕 莊嚴』 *rGyan*〔の〕 根本〔頌と〕 注釋（北京No5284 :5285）と、彼の弟子たる蓮（6/7）華戒が『中観明』 *dBu ma snañ ba*（北京版No 5287）と言われる論書をお造りになり〔それ〕らに対して自立が発生 *śar pa* した中観の三種の論書と称し且つ、昔法王たるデウツェン *lDeḥu btsan* の時代に翻訳 *ḥgyur* し且つ決（7b7/8a1）定してからゴク大翻訳師が、それらの論書に略義と、語義の説示を沢山お造りになったそれらの説示〔の〕相承は今日の間に〔到るまで〕断じていないことから、大翻訳師が印度でお聞きになったか、〔父方の〕叔父からお聞きになった（1/2）と考察されるべきである。寂護の随従者〔の〕ひと方は軌範師たる獅子賢 *Señ ge bzañ po* であって、この方が般若經 *Yum* の意義を注釋するやり方は、瑜伽行派のやり方の様に注釋するので、相〔の〕認識を否定するやり方は実体性は無い〔と言う〕正理〔であること〕と、（2/3）修習によって体得されるべき〔こと〕は瑜伽行派の考え方で説示されたこと〔であることと〕については総ての有雪国人が一致していることであるのだ。寂護ご父子が『〔量〕 評釋』 *rNam ḥgrel*（北京版No5709）をお造りになったお考えはまた、増益を断ずるやり方は一〔と〕多〔を〕離れた〔こと〕 *gcig du bral*（3/4）など〔の〕自〔性が〕空である *rañ stoñ* 正理〔で〕そして、体得されるべき〔こと〕は〔円成実性以外の〕他〔の〕法（遍計所執性と依他起性）が〕空である *gshan stoñ* やり方で説示すると大翻訳師が注釋し且つ、その偉大な方ご自身も『評釋』のお考えをその様な〔もの〕とご承認なさった。正理の自在者たるチャバ *Phya pa* は、〔量論〕七部（4/5）に於いて暫定〔的に〕經〔部と唯〕識の考え方を設定したことなどは、『評釋』をお造りになったその方のお考えそのものと一致しないので、決定するやり方と体得されるべき〔ことと〕はまた無いと否定する空性だけであると説示する（5/6）それらのことは中観自立派の説示〔する〕やり方を要略として言っていて、帰謬派と称される説示の説示〔する〕規矩の最初は、吉祥〔を〕俱えた月〔称〕 *Zla ba* の足下が仏護に対して清弁が述べた（6/7）罪惡をお棄てになって以来称されたことであるのであって、仏護のお考えが帰謬に住すると〔は〕清弁によって説示されていない。清弁がお考えにならなかったやり方を月〔称〕が説示〔する〕考え方は中（8a7/b1）観派であるのであるならば、自宗に対する自立の能成就と、他宗に対する反対〔の〕意義を招引する帰謬〔と〕によって批判することではないのであって、〔何故ならば〕住するやり方（状境）を考えることに入った時自宗〔の〕承認が無いが故にと、（1/2）それが有るならば戲論の辺に墮すことによってである。その故に外〔と〕内の外道を否定する明知は、他〔宗〕に於いて称される比〔量〕、矛盾を述べた帰謬、理由が相似する類推、能成就が所成就と（2/3）相似する不成就、と言われる正理などの門によって他宗の考えが心中で消滅する程度で充分であって、自宗が確定する比量を生ずる〔こと〕は必要ではないのだ。その様に説示されたことに於いて、自立派の（3/4）軌範師〔の〕後者が、清弁の説示〔する〕やり方に於いて、幻理成就 *sgyu ma rigs grub* に過ぎる罪惡によって害されなくて、〔何故ならば〕所遮たる戲論の集合が

消滅する時、彼の敵者は戯論が無い〔こと〕も消滅することによってである。と説示することなのであって、その時〔帰〕謬〔と〕(4/5) 自〔立の〕両者は最終的には戯論の総ての集合を否定した無いと否定するそれそのものに於いて細〔と〕粗の差別を了承なさらない。後の有雪国人たちは〔帰〕謬〔と〕自〔立〕の差別をこれ以外に説示することによって完全に迷誤した。

〈32122〉第二 (5/6) は、聖なる国に於いて無着兄弟の規矩がおいでになったやり方は、謂る、私が涅槃した後に 年は九百〔年〕経過した時 無着と言われる比丘が その論書の意義に熟達し 未了義〔と〕了の義の經典〔の〕 沢山の種類 (6/7) を完全に分析し と言う未了〔と〕了〔義〕を如理に分析すると預言が得られたその方が、〔仏〕法相承の三昧を成就してから兜率〔天〕の住処においてになって、弥勒の五法と、偉大なる『瑜伽師地〔論〕』 *rNal ḥbyor spyod paḥi sa* (北京版No5536~43) などを広く (8b7/9a1) お聞きになって、論書にお造りになってから聖なる国に迎請なされた方であるのだ。そこで彼の弟御たる世親 *bByig gñen* がお聞きになって、〔彼は〕『解深密〔経〕』 *dGoḥs ḥgrel* (北京版No774) の論書たる品論〔の〕 八部 *rab tu byed pa (pra ka ra ṇa) sde brgyad* と称されるものなどを (1/2) お造りになってから、瑜伽行派の論典で海の様な義の中観である所のものそれを明らかに為さった方であるのだ。それはまた何かと言うならば、謂る、聖なる提婆が、所取と能取から解脱する 智慧は勝の義に (2/3) 有り 瑜伽行の論典で海の〔様な〕 波羅蜜などを是くの如く宣布した と言っているその方自身である。若しも然らばその意義そのものは弥勒の総ての法のお考えとして正確であるのかと言うならば、この意義について後のチベット人たちの内から、或る者は、五部分に於いて (3/4) また唯識派そのもので正確である、と〔言い〕そして、或る者は、一切は中観で正しいと〔言い〕そして、この後代に於いて、最初〔『現観莊嚴論』〕〔と〕最後〔『弁中辺論』〕〔の〕二は中観そして、中間〔の〕三は唯識で正しいかと声を一つに言おうとするけれども、私たち (4/5) は、弥勒の論典〔の〕最初〔と〕最後〔の〕二も般若の経のお考えたる第三の〔法〕輪によって注釋したそれそのものの中観を教示されるべき根本そのものと為さったことに於いて論典そのものの説示〔する〕やり方が現前〔識〕によって成就したと承認する。それは (5/6) またこの様に、『現観莊嚴』 *mÑon par rtogs paḥi rgyan* (北京版No5184) の教示されるべき根本は、隠〔された〕意義を現観すること〔の〕八と、それを説示させる意義〔の〕七十と称されることなどの内から、隠〔された〕意義の現観は、所取〔と〕能取と離れた (6/7) 智慧の部分から識別されることなのであって、それらの瑜伽の棄てられるべき〔もの〕たる相応しない方面 *mi mthun paḥi phyogs* (異品；所治) を識別する時、所取と能取の分別そのものについて数を正確に説示し且つ、その敵者はまた、謂る、四ある分別 *rnam rtog* (9a7/b1) *bshi* (四分別) と共に依存すること と言う所取〔と〕能取で現前したものと離れた智慧について説示し、その能知はまた、色などに住さないが故に と言うことによって所取〔と〕そして、そこに結び付くものを否定したが故に と

言うことによって能取と (1/2) 離れたことそのものについて説示してから、基智 *gshi śes pa* の区別などは 行相であると言われる相性であって と言う智の行相そのものが体得されるべきであると説示することとは、正確〔に〕分析する部分〔と〕相応すること *ñes ħbyed cha ħthun/mthun* (順決擇分) から認識されて、相続〔の〕最後 *rgyun mthah* (最後有) の智慧の間まで一切の (2/3) 外延 *khyab byed* (能遍) となる必要のあることであるのであって、〔何故ならば〕謂る、夢とそれが見える〔こと〕そのものは 二つのやり方で見えるのでない様に 諸法は二として無いものそのもので 刹那は一として了悟される と仰せになったことによってである。説示させる意義〔の〕七 (3/4) 十の論典などが、母 *yum* (般若) の経の明白〔な〕教示は如実に〔であり〕、一切の法は自〔性が〕空性 *rañ stoñ pa nid* であると決定したことである。それと同様に『最上要義の論』*rGyud bla mañi bstan bcos* (北京版Na5525) でも、空性と蔵の識別を (4/5) 教示する時、客〔塵〕などの趣は空であるが 無上なる〔もの〕は法の空でないのであるのだ と言うことそして、真実〔の〕辺は有無によって 一切の行相が寂靜であって と所遮を否定するやり方と、体得するべき〔こと〕の両者の識別はまた (5/6) 他空のやり方で明らかに説示していることであるのだ。それだけに終わらず、三つの中間の弥勒〔の〕法の見解が唯識に住するならば、それから説示される五道 *lam lña* と、十地 *sa bcu* と、結果たる仏の地 *sañs rgyas kyi sa* の設定〔の〕一切は如何様なもので〔も〕ない (6/7) のだと損減する必要がある。その理由そのものの故に、無着兄弟がお造りになった大乘の総ての論典と、陳那 *Phyogs glañ* ご父子がお造りになった総ての論典は、了義の中観は、般若 (9b7/10a1) 波羅蜜の経のお考えを善ろしく完全に分析した経によって如何様であれ注釋したそれそのものに住する。と言われるこのことが成就したものである。

〈32123〉第三は、二ある規矩〔の〕開始は矛盾しないと説示するやり方は、謂る、(1/2) 弥勒〔と〕無着が仰せになり且つ 龍樹もお認めになった 正量は経言〔量〕と共〔に〕なった この二ある諦であると説示されるべきである と大学者たる寂〔護〕*Śanti pa* が『中観の莊嚴』*bBu mañi rgyan* と言われる論書で著述するについて主題をお造りになった。それで規矩〔の〕両者が中観〔の〕正理聚から説示された空性のみを了義と説示することに於いて同じであるのであるかと言うならば、〔そう〕でないのであるが、龍樹がまた心の金剛に対して了の義そのものであると (3/4) 説示したそのことがここに集約されることである。他の人々が言う、寂〔護〕のこれはご自分〔の〕考えであるのだが、中〔観と唯〕識の見解が一つに融合することが何処に在ろうか、と言うけれども、その様であるならば寂護ご父子と、獅子賢など瑜伽行 (4/5) の中観派と称される方の見解に対して損減する必要がある且つ、あなたが確立したことでもないものであって、〔何故ならば〕自証を現前〔に〕ご了承になること〔の〕総てを明白〔に〕述べることそのものであると説示することによってである。

〈3213〉第三は、〔密〕咒の中観を (5/6) 別途に注釋したやり方が無いことはあ

り得ない〔と〕教示することに三あって、〈32131〉要略として教示することと、〈32132〉少し広く説示することと、〈32133〉論争を棄てることである。

〈32131〉最初は、波羅蜜の中観のやり方で以前に説示したそれらから別途に〔密〕咒（6/7）の中観を明らかに教示する論典は幾分を表示するならば、『呼金剛』から、謂る、瑜伽行派はそれより後でありその後中観が教示されるべきであり〔密〕咒の次第を全て知ってからその後『呼金剛』が説示される（10a7/b1）と言う見解が次第〔に〕進む〔こと〕を説示する場合に順序通りに、所取〔と〕能取が無二である智慧と、一切法は自己の実体が空である無いと否定することと、所縁が無い悲愍と空（1/2）性が双運する見解〔の〕三が次第に説示される。他の人々が言う、その最初は唯識の見解そして、この後者は正理聚の見解以外に無いと言うけれども、無着兄弟が中観派である（2/3）と言う宗義を述べる第四だけは識別しないのか、識別するならばそれは如何なることであるのであるか、最初の様であるならば、謂る、仏教徒の第四と、能仁（仏）の第五のお考えは無いと言うことと、尊者たる弥勒が（3/4）中央と辺を完全に区別すること *dbus dañ mthañ rnam par ḥbyed pa*（『弁中辺〔頌〕』北京版No5522）と仰せになったそのことは棄てる必要があることとなって、彼が実体性は無いことを述べることにしてそこで考えていると言うならば、〔そう〕ではないのであって、〔何故ならば〕それについては『阿毘達磨集〔論〕』 *mñon pa kun las btus*（北京版No5550）で説示すると述べることをそのものを説示することによってそして、（4/5）月〔称〕が世親などが実体性が無い〔とする〕者の見解を領悟していないと説くことによってである。『呼金剛』は〔密〕咒の見解でないのであるのか、と言うならばまたそれそのものは実体性は無い〔と言う〕見解と差別は無いと説く所の者は誰で（5/6）も考え方から超越した者であるのであって、〔何故ならば〕究竟次第の見解を識別するよう出来ないことそして、実体性は無い〔とする〕者たちに於いてはあなたが考える有境は安樂が大きいので対境〔の〕空性を了悟する者であると言われるそれは無いことによってである。

〈32132〉第二（6/7）は、〔密〕咒のその中観を明らかに教示する論書はまた菩薩の注釋たる三類 *byañ chub sems dpañi ḥgrel pa skor gsum* と、『秘密集会』 *gSañ ba ḥdus pa*（北京版No81）と、『輪律儀』 *ḥKhor lo sdom pa*（北京版No30, 57参照）の五次第 *rim pa lña pa*（北京版No2150参照）など〔のそれ〕らと、『道果（10b7/11a1）たる金剛句偈』 *Lam ḥbras rDo rjeñi tshig rkañ*（デルゲ版No2284）と、『解脱の明点』 *Grol bañi thig le*（北京版No2722）など総ての〔それ〕らである。それはまた幾分を表示するならば、〔菩〕薩〔の〕注釈〔たる三類〕 *sems ḥgrel pa* などは、一切の行相の最上と共なる空性であると言い、瑜伽者の現（1/2）前〔識〕 *rnal ḥbyor pañi mñon sum* によって了悟されるべき根本そのものであると説示するそれが、実体性は無い〔と言う〕者の空性と一義に集約するならば、その様〔に〕それは聞〔と〕思の知によって了悟されるべきもののそのものとして誤まることによってそして、分別された対境に為し得ることそのものとして誤まることと、成

熟 (2/3) させる灌頂に依存せずに体得されるべきことそのもので適切な〔のにその〕ことが非常に誤まりとなることである。それ故に沢山に述べたことによって一体何〔に〕為ろうか、『聖文殊の名讃』 *hPhags pa hjam dpal gyi mtshan yañ dag par brjod pa* (北京版No2) から現われる聖なる文殊の (3/4) 勝義のお名前と言うのは戲論の一切の辺と離れた智慧そのものであるが故に中観であって正しくて、波羅蜜の乗の者たちに於いて無いので〔密〕咒の中観だけである。

〈32133〉第三は、若しも波羅蜜〔の〕乗〔の〕者たちに於いて称されていない (4/5) 〔密〕咒の中観なるものを承認するならば、印度人の軌範師たる智金剛 *Ye śes rdo rje* が、謂る、〔密〕咒に全く住さない *rab tu mi gnas*〔こと〕から 増上の見解が無い〔こと〕が有るならば その見解は戲論〔と〕共なる〔もので〕軌範師は迷乱している と言うことと、サキャバが、波羅 (5/6) 蜜の戲論〔と〕離れる〔こと〕 *spros bral* から 増上の見解が有るならば その見解は戲論をもつものとなる と説示することと矛盾することでないのか、そればかりでなく、波羅蜜から説示される戲論〔と〕離れる〔こと〕を現前に了悟する相続〔の〕最後の智慧 (6/7) によって棄てることの出来ない障害が有ることとなって、その様に考えるならば、波羅蜜乗が獲得した仏は効力が無いこととなると言うならば、その様に説示するそれらは増益を断じさせる見解の為に為された (11a7/b1) こと明らかであって、そうでなければ、慈氏 *Mai tri pa* がお造りになった『十真性』 *De kho na nīd bcu pa* の『〔広〕釋』 *hGrel pa* (北京版No3099; 西岡No2709, 2710 参照) で俱生金剛 *lHan cig skyes pañi rdo rje* が、謂る、全く住さないと云われるのは 上人の話が荘厳しない 中観はまた唯中間そのもので と言うことと矛盾 (1/2) し且つ、サキャバが、それ故に説示されたことによって理解する 聞の見解は唯一であるのであり と言うその唯一は聞〔と〕思によって決定されるべき〔こと〕であるのだが、体得されるべき〔こと〕と説示されないが故にそして、それと同様に、『〔因の〕三相〔の〕燈』 *Thsul gsum sgron me* に於いて、一義 (2/3) に於いてまた迷乱しない〔こと〕と と言う経〔と密〕咒〔の〕二を了悟すべき見解などは一と説示することも、説示〔する〕やり方は前者の様であり或は、それとも、〔密〕咒と弥勒の論典から説示されたことなどは、修習によって体得するべき見解〔と〕対境が (3/4) 一つのものであるとお考えになっている。その通り〔で〕相続〔の〕最後で間断無き道によって批判出来ない障害〔の〕有無を一時放置してから、異生が一時に仏を現〔前〕にすることは、〔密〕咒の方便〔に〕熟達〔する〕 (4/5) だけでなく、〔密〕咒の中観のみに観待することであるのであって、波羅蜜〔乗の〕人の見解によってもその様に出来るならば、真実の辺は時でないのであるのに現〔前〕にされてしまう過失であること明らかでありそして、その過失はまた断じた涅槃に (5/6) 墮すこととなることである。要するに〔密〕咒のこの中観の相性は、エーバム *e vañ* と云われるそれであるのであって、これはまた一切のタントラの因縁でありそして、それはまた現〔前〕にする方便は第四灌頂などであって、『呼金剛』から、エーバムは (6/7) 行相が

大安樂で 灌頂から真実が知られるべきであり と言うことと、それは聞〔と〕思によって知ることのみによって了悟するべき〔こと〕ではないのでありまた、謂る、他〔の者〕によって語られた〔こと〕でない俱生〔の智慧〕は 何に於いても得られなくて 上人の時〔と〕方便〔に〕依止 (11b7/12a1) したものでありそして 自己の福德から知られるべきである と言うことと、戲論が無い自性に於いて 天と〔密〕咒は完全に住す と言う俱生の智慧だけが天と〔密〕咒の成就〔の〕基礎であると仰せになった (1/2) ことと、各々の成就法の最初に、智慧資糧を集積する時、空性を修習するやり方に於いて、スヴァブハヴァ sva bha va (自性) の様な〔密〕咒によって突然に明らか〔に〕想起することと、正理によって破壊してから空であると解説する二つのやり方について仰せになったこと (2/3) の内、最初は天と〔密〕咒などを成就する基礎となったその空性を明らか〔に〕想起することなのであって、その後者は戲論を排する為に為されたことである。他にも〔密〕咒と波羅蜜と称される二ある中観の二辺 (3/4) を排するやり方はまた同様でなくて、エーと言うことによっては増益の辺を排して空性である。それはまた何かと言うならば、円光〔占卜〕pra phab pa の様な有色であって、無いと否定することではないのである。ヴァムと言うことによっては無である辺を排すること (4/5) であって大安樂である。ここで所縁が無い悲愍であると言われて、〔何故ならば〕有境たるその大安樂によって、対境であるその空性に於いて相そのものに縁ずるが故である。知と所知は一であると言われて、〔何故ならば〕物体が無二 (5/6) に双運するが故である。波羅蜜の中観に於いては、謂る、分別などは事物が有るならば変化するものであって と言う対境に於いて有〔と〕無などの辺を否定してから戲論は無いと説示して、〔密〕咒に於いては、(6/7) 最初そのものから有無と認識することなどを否定することに於いて戲論〔と〕離〔れた〕と識別することであって、対境の戲論〔と〕離〔れたこと〕と、有境の戲論〔と〕離〔れたこと〕の二の門によって説示することはまた、二つの考え方の戲論〔と〕離〔れたこと〕を説示する考え方の差別 (12a7/b1) などであるのだ。

〈322〉第二は、チベット国に広まるやり方に三あって、〈3221〉龍樹ご父子の中観がおいでになったやり方と、〈3222〉弥勒〔の〕法〔に〕随従した中観がおいでになったやり方と、〈3223〉〔密〕咒の中観がおいでになったやり方である。

一五九 〈3221〉最初に於いて、〈32211〉自立の論典が広まったやり方と、(1/2) 〈32212〉帰謬の〔論典が広まったやり方〕と、〈32213〉その二者に於いて取捨がどの様に現われたかである。

〈32211〉最初は、中観たる自立が出現した三 Rañ rgyud śar gsum〔論書〕の説示したこと〔の〕要略は昔法王の時代に翻訳を為さった時また現われたこと明らかであるけれども、聞〔くことと〕説示〔すること〕の門によって本当 (2/3) に明らかに決定した方は、謂る、東方〔の〕海に依ってから そこから広野の涯てに到り 有慧 blo ldan たるローヒタ (ブラフマプトラ河) 以外〔で〕 彼は名前が

般若 *śes rab*〔の〕究極〔に〕住する者で 北にその通り〔に〕有雪国 と言うなど (3/4) の預言が当たった大主宰者 (ゴク=ロデンシェラブ) その方が、沢山の注疏などの門によって最高〔に〕本当に明らかに為さった。彼の説示〔した〕規矩を保持する多くの方々の内から主要〔な方〕はキュン=リンチェンタク *Khyuñ Rin chen grags*, 彼の弟子たるギャマル=チャン (4/5) チュプタクパ *rGya dmar Byañ chub grags pa* と、カンバシェウ *Gañs pa šeñu* などと称される方の内から、ドルンパ=ロドチュンネー *Gro luñ pa Blo gros ḥbyuñ gnas* はその大主宰者の総ての仏典の規矩〔を〕保持〔する方〕であるのであり、彼とギャマルワ〔の〕二方にチャパ=チュキ (5/6) センゲ *Chos kyi señ ge* がお聞きになり、彼が共通に仏典の沢山の注疏と、特別に自立〔が〕現〔われた〕三〔論書〕の沢山の注疏をお造りになり、その軌範師によって弥勒〔の五〕法と、中観の受教〔が〕重〔なること〕がワンチュクセン (6/7) ゲ *dBañ phyug señ ge* に現われ、彼にサキャパンディタ *Sa skya pañḍi ta* (1182~1251) がお聞きになり、彼がウユクパ *Hu yug pa* そして、彼によってシャン=ドデバ *Shañ mDo sde pa* など〔の方々〕が次第に相承してそれが法主たるラマダンパ *Bla ma dam pa* そして、彼から宝たるヤクパ *gYag pa* においでになった。

〈32212〉第二は、帰謬派と称される (12b7/13a1) 中観がチベットにおいでになったやり方は、謂る、龍樹〔の〕弟子は月称であるのであり 彼から相承する教授によって 法性たる諦を了悟するようになる と仰せになった如く、尊者たるアティーシャ *A ti śa* (982~1054) がチベット国においでになったその (1/2) 時、月〔称〕ご自身の論典は現前になっていなかったけれど、『二諦分別』 *bDen pa gñis kyi rab tu byed pa* (デルゲ版No3881~2) などのお考え〔を〕注釋〔した〕小品の論書 (北京版No5298=5380) などをお造りになり、彼が善知識たる〔ドム〕トンパ *[ḥBrom] ston pa* (1005~1064) に仰せになり且つ、彼から三士の (2/3) 道の次第に対し、甚深〔の〕見解の部分などは月称の考え方を基礎として設定してから、現在の間においでになった。月〔称〕の足下の論典〔の〕注釋〔の〕主要部分などは、ペンユル〔の〕ゲル *ḥPhan yul rGyal* でパツァブ *Pa tshab* の家系からご誕生 (3/4) になったニマタク *Ñi ma grags* が印度と、カシミールで23年間学習を為さり、金鎧 *gSer gyi go cha* などの三〔名〕の学者をご招請し、ラサ *Ra sa*〔の〕トゥルナン *ḥKhrul snañ*〔寺〕などで共通に月〔称〕の沢山の論典と、特別 (4/5) に『根本〔中論〕』 *rTsa* (北京版No5260)〔と〕『入〔中論〕』 *ḥJug* (北京版No5261, 5262)〔と〕『四〔百論〕』 *gShi/bShi*〔の〕三などを翻譯してから講義によって決定し、これは〔善〕知識たる偉大なるシャラワ *Śa ra ba* (1070~1141) が般若波羅蜜について講義をお為しになったことと同時であり且つ、主たる三時〔を〕お知りになったジャサン=タクドゥブ (5/6) パ *Ja bzañ Brag sgrub pa* がお為しになったこととも同時であると称されて、偉大なるシャラワがパツァブの講義の沢山の有利〔な〕条件 *ḥthun/mthun rkyen* (順縁) をお為しになり、自分の弟子たるロイトゥチェン *Bloḥi mthu can* などが中観をお聞きになるようさせ、その時パツ

ャブの四子と称された方々は、(6/7) 言葉〔と〕意義〔の〕両方に精通したマチャ=チャンチュブツォンドゥ rMa bya Byañ chub brtson ḡgros〔で〕、この方はチャパの弟子たるマチャ=ツォペーセンゲ rTsod paḡi seḡ ge と同一〔人物〕であろうか〔と〕も言い、また言葉に精通したツァンパ=サルウォエ gTsaḡ pa Sar sbos であって、この方の講義の学僧がニャン Ṅañ 地方に (13a7/b1) 果実ほど現われたと言い、意義に精通したダルユルワ=リンチェンダク Dar yul ba Rin chen grags であって、論著を沢山お造りになったが相承を取り得た方は現われなかったと言、言葉〔と〕意義〔の〕両方に等分であるシャン=デェンネーイェシエ Shaḡ ḡByuḡ gnas ye śes であって、彼がタンサク Thaḡ sag の法 (1/2) 院を建立し、翻訳師の傍注と科文に依り、彼の方がまた各種の注疏をお造りになって現在の間に相承し断じず、それはまた『根本〔中論〕』〔と〕『入〔中論〕』〔と〕『四〔百論〕』〔の〕三の論典〔の〕説示〔と〕、帰謬〔の〕考え方の中観の見解〔の〕解説 (2/3) などであって、シャンから十〔名〕ほどの相承者が経過した最後に、マルトン=ジョンヌゲンツェン dMar ston gShon nu rgyal mtshan と言われる一人の学者が現われ、彼にウー dBus〔と〕ツァン gTsaḡ の沢山の学者が接し、弟子は本当に沢山であって、主たる偉大なるロントン Roḡ ston (3/4) (1367~1449) も彼の弟子である。他日尊者たるレンダーパ Red mdaḡ pa (1349~1412) は、帰謬〔の〕考え方の中観を偉大なるドクドクバ mDog ldog pa にお聞きになったと言って、彼が何者にお聞きになったかは分からなくて、レンダーパが、『根本〔中論〕』〔と〕『入〔中論〕』〔と〕『四〔百論〕』〔の〕三の注 (4/5) 疏を、見解〔の〕解説と共〔に〕お造りになったその方からお聞きになったのは偉大なるツォンカパ Tsoḡ kha pa である。

(以下続く)

(本学教授・仏教学)